明治時代前半における洋釘の普及と和釘併用の背景

STUDY ON THE DIFFUSION OF THE WESTERN NAIL AND BACKGROUND OF THE COMBINED
ON THE USE OF THE JAPANESE NAIL IN THE FIRST HALF OF THE MEIJI PERIOD平山 育男^{*1}

Ikuo HIRAYAMA

This article examined the spread of nails in the first half of the Meiji era, based on the business situation in Yokohama published in the Chugai-bukka-shimpo and Chugai-shogyo-shimpo. The following points became clear.

According to the description of the Chugai paper in Yokohama from the Meiji 10s to the mid-Meiji 20s, the nails were identified as “iron nail”, “nail-rod” and “nail”. Japanese nails were manufactured using imported nail iron. These Japanese nails and imported western nails circulated, and the combined use of Japanese nails and western nails was seen in the late Meiji 10s.

Keywords : iron nail, nail iron, nail-rod

鉄釘, 釘鉄, 釘棹

1 はじめに

筆者は、前稿までで明治時代における洋釘の普及と価格の観点から考察している。その結果、『中外物価新報』及び後続紙となる『中外商業新報』（以下、両紙を総称する場合、『中外』紙）^{注1)}に掲載される横浜商況の記載などから、少なくとも明治 15(1885)年以後において最も使用量の多かった 1 吋半の長さを有する洋釘について価格の変遷を明らかにしている。そして、これを明治 8(1875)年における開智学校の見積資料にある同じ長さとなる和釘の価格^{注2)}と比較すると、既に明治 15(1885)年の段階における洋釘の価格は明治 8(1875)年における和釘の価格に対し 1/21 となっており^{参考5)}、更に明治 25(1892)年以後は宮本又次郎による『明治期大阪卸売物価資料(4)』（以下、『物価資料(4)』）^{注3)}などにより、明治時代末には 1/50 程度であったことを考察した^{参考4)}。

ところで明治 15(1885)年以前の段階における、洋釘の普及はどのような状況であったのか、との疑問が残る。この点について安田善三郎による『釘』（以下、『釘』）では

明治十年ころ、横浜百六十八番館（商館名不明）へ見本四五十樽の着いたのが、商品として輸入された始めなうであります^{注4)}

とされ、明治 10(1877)年の横浜商館による輸入の情報が伝聞の形で示される^{注5)}。一方、関西では、梅本商行による『釘とともに歩んだ 120 年』において

現在の丸釘、その当時の洋釘は何時どのような経路で日本に入ったのであろうか。明治 5 年、当社斯業創業の三代目梅本利右衛門が神戸の商館（注）を通じて初めて輸入し、国内に広めたことになっている。

（注）明治 7 年 12 月二代目死去に際し、香奠受領の記録に「神戸 10 番・アーレス社、同 46 番・エストマン商会、同 48 番・モラカン商会、同 56 番・フレヴォ商会と外国商館の名前が記されてあるので、その中の 1 社や 4 社全部から買っただけが明らかではない^{注6)}

として、明治 5(1872)年頃の梅本による洋釘輸入の可能性を示す。但し、以上の記載はいずれも確実な根拠に基づくものではない。一方、筆者らは明治 10(1877)年代後半から明治 20(1887)年代にかけて、角釘となる和釘と丸釘となる洋釘が併用されたことを既に報告^{参考2)}している^{注7)}ものの、これ程の価格差があったにもかかわらず、角釘と丸釘が一定期間、併用された理由を明示できてはいない。

そこで、本稿では明治時代前半における洋釘の普及について実態に即して考察を行うとともに、角釘と丸釘が併用された背景を明らかにすることを目的とする。

2 考察に用いる資料と概要

2-1 本稿で用いた資料

かつて、明治時代において洋釘の価格を記す資料として大阪大学

^{*1} 長岡造形大学造形学部 教授・博士(工学)、博士(造形)

Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

物価史研究会の宮本又次らによる『物価資料(4)』を用いた。但し、これは明治 25(1892)年以後における統計資料をまとめたものであるため、それ以前の状況を知るために明治 9(1876)年創刊の『中外』紙における横浜商況の鉄類などに掲載される釘類の記載を用いた。そして前稿ではこの内、特に明治 15(1882)年から明治 24(1891)年の 10 年間に於いて 1 寸 2 分の長さとなる丸釘の価格を抽出し、その変遷を追い考察を行った^{参考 5)}。

ところで、明治 9(1876)年から明治 24(1891)年における『中外』紙の記載を通読すると、1 寸 2 分となる丸釘の価格以外についても輸入された釘類について多くの情報を得ることができた。そこで、本稿ではこの期間における『中外』紙の横浜商況に示された釘類の記載を整理することで、当該期間における洋釘の普及について考察を進めることとする。

2-2 『中外』紙の横浜商況に見る釘類の概要

具体的には、明治 9(1876)年から明治 24(1891)年における『中外』紙の横浜商況における鉄類などの記載中、“釘”とする記事を網羅的に拾い上げて検討を加えた。なお、大別するとこの期間では、

- (1) 釘・鉄釘・丸釘(以下、総称する場合は“鉄釘類”)
 - (2) 釘棹・釘棹鉄(以下、総称する場合は“釘棹類”)
 - (3) 釘鉄・釘鉄角・釘角(以下、総称する場合は“釘鉄類”)
- とする 3 種類の記載を確認することができた。以下ではこの 3 項目を中心に、当該期間における洋釘の普及を考察する。

3 明治 9(1876)年から明治 24(1891)年の『中外』紙 横浜商況に見る鉄釘類

明治 9(1876)年の創刊から明治 24(1891)年の『中外』紙の横浜商況における (1) 鉄釘類、(2) 釘棹類、(3) 釘鉄類について概要を Table 1 に示した。以下、各項目の記載内容に検討を加える。

3-1 釘・鉄釘・丸釘

鉄釘類の記載は、明治 10(1877)年 6 月 23 日付の横浜商況に初めて見ることができる。記載は

前二週（四日ヨリ十六日迄）当湊引取物概要《中略》○釘百三十五箱^{注8)}

とあり、この項目に記載される商品がいずれも輸入品であるため、この時点での“釘”、即ち洋釘の輸入取扱を確認できる。更に同年 12 月 25 日付の記載でも

前一週（自三日至八日）当港引取物概略《中略》○釘二百樽^{注9)}とあり、明治 10(1877)年における 100 箱以上となる釘の取引を 2 度に渡り確認することができる。続いて明治 11(1878)年は 1 月 16 日付の記載に

黄銅釘八百四十斤《中略》鉄釘金八百斤^{注10)}とあり、明治 11(1878)年は 1 月 23 日付の記載には

鉄釘二万千百斤^{注11)}とある。明治 12(1879)年では鉄釘については 3 例で“鉄釘一樽”^{注12)}、“洋鉄釘 十四匁”^{注13)}、“鉄釘三十匁”^{注14)}、“鉄釘百斤七円”^{注15)}とする記載があり、丸釘については 2 例“鉄丸釘四分五分込八十匁”^{注16)}、“鉄丸釘”^{注17)}で、鉄釘類では合計 5 例の記載が見ることができる。明治 13(1880)年に“鉄釘類”の記載は見られず、明治 14(1881)年は“鉄釘”^{注18)}とする 1 例のみの記載しか確認できないが、“丸釘”を明治 15(1882)年は 5 例、明治 16(1883)年は 10 例、明治 17(1884)

年は 27 例を確認でき、この頃からいわゆる丸釘の輸入が本格化したと見ることができる。

このように、輸入された鉄釘類は当初、単に“鉄釘”などと呼称されたものの、在来の角釘と差別化するためであろうか、明治 12(1879)年 5 月 28 日付の記載を初例として“丸釘”とする呼称を確認することができる。

なお、本稿では以下、この鉄釘類を“輸入丸釘”と称する。

3-2 釘棹・釘棹鉄

3-2-1 釘棹類の輸入

釘棹について記載の初見は明治 10(1877)年 3 月 31 日付の記事に釘棹ハ二弗七分五厘方三弗壹分^{注19)}

とある。続いて同年 7 月 28 日付の記載では

釘棹ハ（一担ニ付）二弗七分ヨリ三弗迄ニテ更ニ取引ヨロシ^{注20)}とあるため、鉄棹の数詞には“担”を用いたことが分かる。ここで 1 担は約 60kg と考える^{注21)}。以後、同年 8 月 11 日付の横浜商況にも“釘棹”の記載があり、明治 11(1878)年には 6 例、明治 12(1879)年には 2 例、いずれも“釘棹鉄”の記載を見ることができる。また、明治 11(1878)年 7 月 17 日付の記載では

釘棹鉄ベルジウム製ノモモ低価ニテ百噸程ノ取組アリ^{注22)}とあり、ベルギーからの輸入品とすることができる。一方、明治 11(1878)年 11 月 30 日付の記載では

スタッフオールド州ノ釘棹鉄モ亦売レロ宜シ^{注23)}

とあり、イギリスからの輸入とすることができる。

ところで、明治 10(1877)年 10 月 6 日付の記載には

釘鉄ハ少シ騰貴シー担ニ付取交物ハ二弗七分ヨリ三弗^{注24)}

とあり、同年 12 月 28 日付の商況でも

釘鉄ハ一担ニ付二弗六分五厘ヨリ三弗迄^{注25)}

とあるが、後述する“釘鉄”は、この前後では

釘鉄二万五千斤^{注26)}

など、“斤”による重量が示されるため、これも釘棹を指すものと考えた。なお、明治 11(1878)年 9 月 4 日付の横浜商況では“棹鉄”とする商品も見ることができる。

3-2-2 釘棹とは

それでは、釘棹とはどのような製品であったのだろうか。

字面だけで考えると「棹」とは円筒状のものとも考えることもでき、歴史的には「竿金」^{さおがね}として、竹筒に金銀を溶かし円柱状にしたものが中世末から近世初期、国内には存在した^{注27)}ため、「棹鉄」とは円柱状の鉄材で、更に“釘棹鉄”とは釘用の棹鉄、即ち丸釘を製造するための棒状の鉄材とも考えることもできよう。

但し、英字紙では同時代の記事に

Nail-rod[和訳：釘棹]^{注28)}

の記載があり、この訳語と考えるのが妥当であろう。

ところで、この時代、輸入された鉄材を用いて、いわゆる丸釘が国内において製造されていたのだろうか。この点について明治 13(1880)年 2 月 13 日付『朝日新聞』には

○南区瓦屋町四番丁岩重某ハ五千円の資本金を投じ手製の器械を以て舶来模倣の釘製造せしが価が廉て且舶来品と異なる所なければ余程能売捌けると云ふ^{注29)}

とある。また、明治 13(1880)年 3 月 14 日付『朝日新聞』には大阪の砲兵工廠におけるものとして

Table 1 The report of the nail etc. at the Yokohama-market of the “Chugai” paper from 1877 to 1891

明治 10(1877)年から明治 24(1891)年の『中外』紙 横浜商況における釘類の記事

Table 1-1 The report of “Tetukugi-rui”
鉄釘類の記事

Meiji10 1877				
06/23-59 N	12/25-187 N			
Meiji11 1878				
01/16-15 SN	01/23-23 SN			
Meiji12 1879				
04/23-127 SN	05/07-143 SN	05/28-167 RN	10/01-311 SN	12/10-391 RN
Meiji13 1880				
Meiji14 1881				
11/16-263 SN				
Meiji15 1882				
05/10-143 RN	07/18-227 RN	09/19-335 RN	11/04-407 RN	12/23-487 RN
Meiji16 1883				
01/16-23 RN	05/10-209 RN	06/02-249 RN	06/19-277 RN	07/07-309 RN
08/07-361 RN	10/13-477 RN	10/16-481 RN	10/20-489 RN	11/22-541 RN
Meiji17 1884				
01/10-11 RN	01/15-19 RN	01/17-23 RN	01/24-35 RN	01/31-47 RN
02/16-75 RN	02/26-91 RN	03/04-103 RN	03/11-115 RN	03/13-119 RN
03/22-131 RN	04/15-167 RN	05/15-195 RN	05/10-211 RN	05/15-219 RN
05/27-239 RN	06/03-251 RN	06/05-255 RN	07/08-311 RN	08/13-3 RN
08/19-3 RN	08/27-3 SN	10/16-3 RN	10/25-3 RN	10/30-3 RNg1
11/06-3 RN	11/27-3 RN#2	12/25-3 RN#3		
Meiji18 1885				
01/06-3 RN	02/07-3 RN	02/21-3 RN	03/10-3 RN	03/26-3 RN
04/28-3 RN	05/26-3 RN	05/30-3 RN	06/04-3 RN	06/09-3 RN
06/11-3 RN	07/04-3 RN	07/22-3 RN	07/24-3 RN	07/29-3 RN
08/09-3 RN	08/13-3 RN	08/14-3 RN	08/23-3 RN	08/25-3 RN
09/27-3 RN	09/30-3 RN	10/22-3 RN	10/30-3 RN	11/03-3 RN
11/1-3 RN	11/20-3 RN	11/26-3 RN	12/02-3 RN	12/19-3 RN
12/27-3 RN				
Meiji19 1886				
01/07-3 RN	01/15-3 RN	01/16-3 RN	02/06-3 RN	02/16-3 RN
03/21-3 RN	03/23-3 RN	04/08-3 RN	04/30-3 RN	05/09-3 RN
05/16-3 RN	05/28-3 RN	06/05-3 RN	06/12-3 RN	06/19-3 RN
07/04-3 RN	07/10-3 RN	07/24-3 RN	07/31-3 RN	08/05-3 RN
08/13-3 RN	08/19-3 RN	08/21-3 RN	09/01-3 RN	09/23-3 RN
10/01-3 RN	10/06-3 RN	10/09-3 RN	10/12-3 RN	10/21-3 RN
10/27-3 RN	10/30-3 RN	11/03-3 RN	11/18-3 RN	11/27-3 RN
12/02-3 RN	12/10-3 RN	12/17-3 RN	12/21-3 RN	12/23-3 RN
12/25-3 RN				
Meiji20 1887				
01/05-3 RN	01/08-3 RN	01/12-3 RN	01/15-3 RN	01/18-3 RN
01/20-3 RN	01/22-3 RN	01/26-3 RN	01/29-3 RN	02/01-3 RN
02/06-3 RN	02/09-3 RN	02/18-3 RN	02/23-3 RN	02/26-3 RN
03/03-3 RN	03/05-3 RN	03/12-3 RN	03/18-3 RN	03/20-3 RN
03/30-3 RN	04/05-3 RN	04/09-3 RN	04/13-3 RN	04/16-3 RN
04/20-3 RN	04/26-3 RN	05/06-3 RN	05/10-3 RN	05/12-3 RN
05/15-3 RN	05/19-3 RN	05/22-3 RN	05/26-3 RN	05/31-3 RN
06/02-3 RN	06/08-3 RN	06/10-3 RN	06/14-3 RN	06/18-3 RN
06/21-3 RN	06/23-3 RN	07/15-3 RN	07/20-3 RN	07/29-3 RN
08/10-3 RN	08/12-3 RN	09/15-3 RN	10/09-3 RN	10/20-3 RN
10/22-3 RN	11/05-3 RN	11/10-3 RN	11/17-3 RN	11/26-3 RN
12/02-3 RN	12/07-3 RN	12/11-3 RN	12/14-3 RN	12/16-3 RN
12/21-3 RN	12/23-3 RN	12/25-3 RN		
Meiji21 1888				
01/06-3 RN	01/08-3 RN	01/11-3 RN	01/13-3 RN	01/15-3 RN
01/17-3 RN	01/22-3 RN	01/25-3 RN	01/27-3 RN	02/04-3 RN
02/08-3 RN	02/14-3 RN	02/16-3 RN	02/19-3 RN	02/22-3 RN
02/24-3 RN	02/26-3 RN	03/06-3 RN	03/11-3 RN	03/14-3 RN
03/18-3 RN	04/13-3 N	04/26-3 RN	06/23-3 RN	07/11-3 RN
07/11-3 RN	07/22-3 RN	08/09-3 RN	08/17-3 RN	08/26-3 RN
09/02-3 RN	09/05-3 RN	11/21-3 RN	11/27-3 RN	12/01-3 RN
12/22-3 RN				
Meiji22 1889				
01/13-3 RN	01/17-3 RN	02/03-3 RN	02/07-3 RN	02/17-3 RN
02/22-3 RN	03/08-3 RN	03/10-3 RN	03/17-3 RN	03/20-3 RN
03/23-3 RN	03/26-3 RN	04/09-3 RN	04/13-3 RN	04/18-3 RN
04/21-3 RN	05/01-3 RN	05/07-3 RN	05/10-3 RN	05/17-3 RN

○舶来釘の輸入ハ一ヶ年の〔著者注：大阪〕府下へ輸入する分
にても三十二万〇八〇〇円余の金高に及びければ幾分か輸入を
拒がん為當砲兵工廠にてハ右製造器械を備へ続々製出せらるゝ
と云う^{注30)}

とする記事もあり、国内でもこの時期、舶来釘の輸入を阻むため、
既に「舶来模倣の釘」、即ち丸釘の生産が行われていたことが判明す
るわけで、これらの原料として上述した、輸入された釘棹が用いら
れたと考えられる。つまりここで製造された釘は、洋鉄を用いて国

05/22-34 RN	05/25-34 RN	05/30-34 RN	06/04-34 RN	06/13-34 RN
06/20-34 RN	06/23-34 RN	06/29-34 RN	07/06-34 RN	07/13-34 RN
07/18-34 RN	07/26-34 RN	08/02-34 RN	08/17-34 RN	08/23-34 RN
08/29-34 RN	09/01-34 RN	09/05-34 RN	09/11-34 RN	09/15-34 RN
09/20-34 RN	09/29-34 RN	10/03-34 RN	10/09-34 RN	10/13-34 RN
10/19-34 RN	10/25-34 RN	11/09-34 RN	11/22-34 RN	12/07-34 RN
12/15-34 RN				
Meiji23 1890				
01/09-34 RN	01/19-34 RN	01/26-34 RN	02/09-34 RN	02/21-34 RN
02/27-34 RN	03/04-34 RN	03/09-34 RN	03/13-34 RN	03/26-34 RN
04/01-34 SN	04/06-34 RN	04/12-34 RN	05/24-34 RN	05/31-34 RN
06/05-34 RN	06/12-34 RN	08/23-34 RN	08/30-34 RN	09/04-34 RN
10/01-34 RN	10/25-34 RN	11/02-34 RN	11/08-34 RN	11/13-34 RN
12/06-34 RN				
Meiji24 1891				
03/27-34 RN	04/21-34 RN	06/11-34 RN	07/09-34 RN	07/18-34 RN
07/19-34 RN	08/01-34 RN	08/14-34 RN	08/29-34 RN	09/29-34 RN
10/04-34 RN	10/09-34 RN	10/11-34 RN	11/06-34 RN	11/08-34 RN
11/13-34 RN				

Notes:

*1#3 Although the description is “丸釘鉄”, it is considered to be “丸釘” from the price.

記載は“丸釘鉄”であるが、価格より“丸鉄”と判断できる。

*2 Although the description is “鉄丸釘”, it is considered to be “丸釘” from the price.

記載は“鉄丸釘”であるが、価格より“丸鉄”と判断できる。

Table 1-2 The report of “Kugisao-rui”
釘棹類の記事

Meiji10 1877				
03/31-50 NR	07/28-110 NR	08/11-118 NR	10/06-150 NS#01	12/28-191 NS#02
Meiji11 1878				
07/17-215 NRS	09/04/271 RS	09/21-291 NRS	10/06-303 RS	10/16-319 NRS
11/30-367 NRS	12/14-383 NRS	12/25-395 NRS		
Meiji12 1879				
02/15-51 NRS	03/08-75 NRS			

Notes:

*1 Although the description is “釘鉄”, it is considered to be “鉄棹” from the price.

記載は“釘鉄”であるが、価格より“鉄棹”と判断できる。

Table 1-3 The report of “Kugitetsu-rui”
釘鉄類の記事

Meiji10 1877				
03/31-50 NS	07/07-102 NS	09/15-138 NS	11/17-175 NS	
Meiji11 1878				
01/23-23 NS	06/08-171 NS	09/04-271 NS	09/21-291 NS	10/02-303 NS
Meiji12 1879				
01/15-15 NS	02/19-87 NS	03/29-99 NS	04/05-107 NS	04/16-119 QS
04/23-127 NS#1	04/26-131 QS	04/30-135 NS#2	05/07-143 NSQ#3	05/10-147 NSQ#4
05/14-151 NSQ	05/21-159 NSQ#5	05/24-163 NSQ	05/28-167 NSQ#6	06/11-183 NS#7
06/25-199 NS	07/02-207 NS	07/05-211 NS	07/12-219 NS#8	07/19-227 NS
07/23-231 TS	07/26-235 TS	07/30-239 NS	08/02-243 NS	08/16-259 NS
08/23-267 TS	08/27-271 NS#9	09/17-295 NS	09/27-307 NS	10/01-311 NS
10/08-319 NS	10/25-339 NS#10	10/29-343 NS	11/05-351 NS	11/08-355 NS
11/15-363 NS	11/26-375 NS	12/06-378 NS	12/10-391 NS#08	12/13-395 NS#9
12/20-403 NS	12/27-411 NS			

Meiji13 1880

01/04-3 NS	01/31-35 NS	02/04-39 NS	02/11-55 NS	02/25-59 NS
03/06-71 NS	03/19-87 NS	03/24-91 NS	03/27-95 NS	04/07-103 NS
04/17-115 NS	04/24-123 NS	05/01-131 NS	05/08-139 NS	05/22-155 NS
05/26-159 NS	05/29-163 NS	06/02-167 NS	06/05-171 NS	06/19-187 NS
06/03-105 NS	07/17-219 NS	07/24-227 NS	08/07-243 NS	08/11-247 NS
08/21-259 NS	09/04-275 NS	09/15-287 NS	09/22-295 NS	09/29-303 NS
10/02-307 NS	10/06-311 NS	10/13-319 NS	10/16-323 NS	10/27-335 NS
11/13-251 NS	11/24-363 NS	12/01-371 NS	12/08-379 NS	12/15-387 NS
12/22-395 NS	12/25-399 NS			

Meiji14 1881

01/04-3 NS	01/12-11 NS	01/19-19 NS	01/26-27 NS	02/19-55 NS
02/23-59 NS	03/02-67 NS	03/12-79 NS	04/02-103 NS	04/20-123 NS
05/11-147 NS	05/26-167 NS	06/08-179 NS	06/16-191 NS	06/25-199 NS
07/02-207 NS	07/09-215 NS	07/20-227 NS	07/23-231 NS	07/30-139 NS
08/10-151 NS	08/24-167 NS	08/31-175 NS	09/07-183 NS	09/14-191 NS

09/28-207 NS	10/05-215 NS	10/12-223 NS	10/26-239 NS	10/29-243 NS
11/02-247 NS	11/09-255 NS	11/16-263 NS	12/02-279 NS	12/10-287 NS
12/24-303 NS				

Meiji15 1882

01/07-7 NS	11/18-19 NS	02/24-30 NS	02/22-55 NS	03/01-65 NS
03/18-83 NS	03/21-87 NS	03/29-95 NS	04/14-115 NS	04/26-127 NS
05/10-143 NS	05/24-159 NS	06/21-191 NS	07/08-211 NS	07/18-227 NS
07/22-235 NS	08/01-251 NS	08/05-295 NS	08/12-271 NS	08/17-279 NS
08/19-283 NS	08/29-299 NS	09/19-335 NS	09/26-347 NS	10/05-359 NS
10/10-367 NS	10/14-375 NS	11/04-407 NS	11/16-427 NS	12/23-487 NS

Meiji16 1883

01/16-23 NS	03/10-109 NS	04/19-173 NS	05/10-209 NS	06/19-277 NS
07/07-309 NS	08/07-361 NS	09/18-433 NS	10/13-477 NS	10/30-505 NS
11/22-541 NS	12/06-565 NS			

Meiji17 1884

01/31-47 NS	02/21-83 NS	02/26-91 NS	03/04-103 NS	03/13-119 NS
05/01-195 NS	05/15-219 NS	05/27-239 NS	06/03-251 NS	07/31-351 NS
10/25-3 NS	11/06-3 NS			

Meiji18 1885

02/21-3 NS	03/10-3 NS	07/04-3 NS	08/23-3 NS	09/27-3 NS
10/22-3 NS	11/10-3 NS	11/14-3 NS	11/20-3 NS	11/26-3 NS
12/19-3 NS	12/27-3 NS			

Meiji19 1886

01/07-3 NS	01/15-3 NS	03/23-3 NS	04/08-3 NS	04/30-3 NS
05/16-3 NS	06/05-3 NS	06/19-3 NS	07/10-3 NS	07/24-3 NS
08/19-3 NS	09/23-3 NS	10/09-3 NS	10/12-3 NS	10/27-3 NS
10/30-3 NS	11/03-3 NS	11/27-3 NS	12/02-3 NS	12/17-3 NS
12/21-3 NS	12/23-3 NS			

Meiji20 1887

01/05-3 NS	01/08-3 NS	01/12-3 NS	01/15-3 NS	01/18-3 NS
01/20-3 NS	01/22-3 NS	01/26-3 NS	01/29-3 NS	02/01-3 NS
02/06-3 NS	02/09-3 NS	02/23-3 NS	03/03-3 NS	03/05-3 NS
03/12-3 NS	03/30-3 NS	04/05-3 NS	04/13-3 NS	04/16-3 NS
04/26-3 NS	05/06-3 NS	05/10-3 NS	05/15-3 NS	05/19-3 NS
05/22-3 NS	05/31-3 NS	06/02-3 NS	06/10-3 NS	06/18-3 NS
09/15-3 NS	11/05-3 NS	11/10-3 NS	11/17-3 NS	11/26-3 NS
12/11-3 NS	12/21-3 NS	12/23-3 NS	12/25-3 NS	

Meiji21 1888

02/08-2 NS	02/14-3 NS	02/19-3 NS	02/22-3 NS	03/25-3 NS
03/30-3 NS	04/05-3 NS	04/14-3 NS	04/21-3 NS	04/28-3 NS
05/19-3 NS	06/23-3 NS	07/03-3 NS	09/02-3 NS	11/13-3 NS

Meiji22 1889

05/07-54 NS	06/23-54 NS	06/29-54 NS	07/06-54 NS	07/13-54 NS
07/18-54 NS	07/26-54 NS	08/02-54 NS	08/17-54 NS	08/23-54 NS
08/29-54 NS	09/01-54 NS	09/05-54 NS	09/10-54 NS	09/15-54 NS
09/20-54 NS	10/03-54 NS	10/13-54 NS	10/19-54 NS	10/25-54 NS
10/31-54 NS	11/09-54 NS	11/22-54 NS	12/01-54 NS	12/07-54 NS
12/15-54 NS				

として見る事ができる。ここでは“丸角鉄”と併記されて“鉄釘”が記されるため、釘鉄は“丸角鉄”とは区別するとの認識があったことが分かる。以後、明治10(1877)年では7月7日付の記載では

釘鉄五十噸^{注32)}
とあり、同年9月15日付にも
釘鉄六十噸^{注33)}
同年11月17日付には

釘鉄二万五千斤^{注34)}
とあり、1斤=0.6kgとすれば1.5トンの輸入を確認できる。

そして、以後は記載が多く、明治11(1878)年には5件、明治12(1879)年は42件(後述する釘角5例、細鉄5例、釘鉄角1例を含む)、明治13(1880)年は42件とするものが最も多く、明治23(1890)年3月9日付^{注35)}の記載まで確認ができる。

輸入先は明治11(1878)年6月8日付の記載に
釘鉄白耳義産ハ少^{注36)} 取引アリ

Table 2 Number of the nail articles in “Chugai” paper
『中外』紙における釘類記事の数量

year		tetukugi -rui	kugitetu -rui	saokugi -rui
		鉄釘類	釘鉄類	棹釘類
Meiji10	1877	2	5	5
Meiji11	1878	2	5	6
Meiji12	1879	5	43	2
Meiji13	1880	0	42	
Meiji14	1881	1	36	
Meiji15	1882	5	30	
Meiji16	1883	10	12	
Meiji17	1884	28	12	
Meiji18	1885	31	12	
Meiji19	1886	41	22	
Meiji20	1887	63	39	
Meiji21	1888	36	15	
Meiji22	1889	51	26	
Meiji23	1890	26	6	
Meiji24	1891	16	0

Fig. 1 Number of the nail articles in “Chugai” paper
『中外』紙における釘類記事の数量

とあることから、この時期には白耳義^{ベルギー}から輸入と確認できる。

3-3-2 釘鉄に類似する製品の記載

“釘鉄”について明治11(1878)年の記載では単に“釘鉄”とのみ記していたものが、明治12(1879)年6月25日付の記載では
釘鉄三厘十五匁^{注37)}

とあり、これが以後の釘鉄類に対する商況における記載の定番の形式となっている。但し、これ以前の期間では名称や記載が一定せず、検討が必要である。明治12(1879)年5月14日付の記載では
釘鉄角三厘十五匁五分^{注38)}

とする記載があり、釘鉄が角材であったことを伺わせ、同様のものは同年5月24日付の記載^{注39)}にも見ることができる。ところでこの前後では類似する記載として同年5月24日付の紙面では
洋鉄角三厘十七匁^{注40)}

とあり、同年5月21日付の記載にも
洋鉄釘角三厘十五匁^{注41)}

とするものがある。記載の方法はいずれも、当時の“鉄釘”に対する記載方法とは異なるものの、明治12(1879)年5月14日付における“釘鉄”に対する記載方法に則るため、これらも“釘鉄角”、即ち釘鉄類についての記載と考えた。

類似する記載として明治12(1879)年4月16日付の商況に
洋鉄一匁目二付釘角三厘十七匁^{注42)}

10日後となる明治12(1879)年4月26日付の記載に
釘角三厘十七匁 五分^{注43)}

とするものがあつた。これらの記載方法もこの後に定番となる“釘鉄”に則るため、この“釘角”も前述の“釘鉄角”を示し、やはり釘鉄類に属するものと考えた。

また、明治12(1879)年7月19日付の記載には
細鉄三厘十四匁五分^{注44)}

とするものを見ることができる。以後、“細鉄”は同年8月23日付の記載まで5例を見ることができ、この期間には重複して“釘鉄”の記載は確認できないため、この“細鉄”も“釘鉄”と判断した。

3-3-3 釘鉄類とその用途

以上より、“釘鉄”とは、角材の細い形状をしており、これが少なくとも明治10(1877)年から明治23(1890)年に渡って継続的に輸入されていたことになる。それでは、“釘鉄”とは、どのように用いられたのであろうか。

従来、輸入された細線状の角断面を持つ鉄材について、福本都治は和釘の製造について、

明治期になると輸入された細線状の角断面をもつ鉄材、すなわち「線香鉄」が代用され、大正期まで製造された^{注45)}とする。また、先行して村松貞次郎も

明治初年になつても、これら伝統的な和釘の生産はより活発に行われ、「並角」、「線香鉄」などと称する細線状の鉄を外国から輸入しては和釘を生産するほどであつた^{注46)}として、明治時代から大正時代に及ぶまで、輸入された洋鉄である“線香鉄”などと呼ばれるものを原料として角釘の製造がなされたことを指摘している。また、和釘の生産地の側となる、新潟県の燕における資料では

安政の開国で海外と通商されるに及び、手工業製鉄の原料である一名「線香鉄＝並角」と呼ばれる細線状の鉄材が輸入され、

和釘と洋釘との交代期が始まりました。長さ六尺、六貫八百匁を一束として、二厘角から三分角まで(価格は一貫匁銀十二匁)あり、小割りからすぐ釘を造ることになり、続いて丸釘が輸入されました^{注47)}

とする記載がある。この資料では線香鉄＝並角は、細線状の鉄材であり、長さ6尺(1.8m)、重さ6貫800匁(25.5kg)で、2厘角(0.6mm)から3分角(9mm)の材料を1束として、これを小割にすることで角釘が造り出されたとする。

つまり以上の指摘から、“線香鉄”“並角”とされるものが、断面形状などから、上述した“釘鉄”に当たると考えられ、明治時代には、輸入された洋鉄である釘鉄類によって角釘の製造が広範になされていたことになる。なお、厳密を期すため、この時代に海外から輸入された“釘鉄”によって、日本国内で製造された角釘を、本稿では以後、“洋鉄国産角釘”と記す。

4 明治時代前半における釘の流通

4-1 明治時代前半における釘流通の動向

明治9(1876)年の創刊から明治24(1891)年の『中外』紙における横浜商況における“鉄釘類”、“釘棹類”、“釘鉄類”の掲載件数をまとめたものがTable 2、Fig. 1となる。1件当たりの記載は輸入量を示すものではないため、これらは出回った製品などの数量を正確に示すものではないが、全体の動向を示すものとする。

Table 2、Fig. 1によれば明治10(1877)年には、洋釘と一般に呼称される輸入丸釘が従来の報告よりも多数輸入されていたことを確認できる。また、同時に“洋鉄国産丸釘”の原料と考えられる棹鉄類、“洋鉄国産角釘”の原料となる釘鉄類の輸入も既に確認できる。そして明治12(1879)年以後、釘鉄類の輸入件数が一気に激増するが、これは結果として“洋鉄国産角釘”生産の増大を示す。つまり、明治10(1877)年代前半において“輸入丸釘”や“洋鉄国産丸釘”によりいわゆる“丸釘”が一定量は流通していたものの、“洋鉄国産角釘”の増大により、多数の角釘が市場に流通したと判断できる。

一方、明治15(1882)年以後、“鉄釘類”の輸入が漸増し、更に明治17(1884)年以後、掲載件数では“鉄釘類”が“釘鉄類”を逆転し、以後、掲載件数は“鉄釘類”が“釘鉄類”の凡そ2倍程で移行している。これを釘類の流通面から考えると、明治10(1877)年代後半は、“洋鉄国産角釘”が国内で一定数量確保されつつも、“輸入丸釘”が広く流通を始め、その結果、建築の現場では角釘と丸釘の併用が起ったことになる。

つまり、これが、かつて著者等が報告した明治10(1877)年代後半における全国的な和釘と洋釘の併用^{参考2)}の状況なる。但し、厳密に言えば、この時代に流通した和釘とは“洋鉄国産角釘”であったことになる。

4-2 明治時代初期における和釘価格の動向と釘の利用

近世末期から近代初期の期間に関わる和釘価格の動向は、宮本又次らによりまとめられた『近世大阪の物価と利子』^{注48)}に示されている。この資料は、釘商であった今西佐兵衛の帳簿から查出した^{注49)}ものであり、今西商店は明治時代中期には安堂寺橋通に位置し、洋釘商及び金物商を名乗った^{注50)}。この資料から明治時代初期の部分を見ると、明治12(1879)年における釘大5寸の価格0.68円は、明治7(1874)年の1.35円に比較して半額以下となっている^{注51)}。厳密に言

えば、物価を考慮すれば1/2.7に下落している^{注52)}ものの、従来、その理由は示されない。

ここで考えられる価格下落の理由は、上述した“洋鉄国産角釘”の生産が本格化したためと言えよう。この資料で見える限り、角釘の価格は明治7(1874)年を頂点とし、以後下落したと見ることができる。

つまり、和釘の価格について前稿まででは明治8(1875)年における開智学校の見積書を用いたが、この時期、和釘-角釘の価格は最も高く、以下、“洋鉄国産角釘”の普及により和釘の価格は下落したと言える。つまり、和釘-角釘の価格低下により、明治10(1877)年代後半における和釘と洋釘の市場における併存、つまり建築現場における和釘と洋釘の併用が可能であったと考える。

5 『中外』紙に見る“輸入丸釘”の呼称

『中外』紙の記載によれば、輸入された釘、即ち“輸入丸釘”の呼称は、既に述べたように明治10(1877)年6月23日の段階では輸入品の欄においては単に“釘”^{注53)}と記され、明治11(1878)年1月16日の紙面でも“鉄釘”^{注54)}などとされるに留まったが、明治12(1879)年4月30日の記事で初めて“洋鉄釘”^{注55)}、明治12(1879)年5月28日には“鉄丸釘”^{注56)}とされた。そして単独で“丸釘”とする呼称は明治15(1882)年5月10日における記事^{注57)}が初見で、以後は“丸釘”の呼称が一般的となった。

一方、同時期における他紙の記載を見ると、明治13(1880)年3月1日付『朝野新聞』^{注58)}では

○府下を始め諸国にて使用する釘八十中の七八まで上総釘なるに近來製造僞惡に流れ為めに舶來釘を使用する者日に多き故之を改良して西洋釘の輸入を防がんと《以下略》

として同一の記事の中で“舶來釘”と“西洋釘”の語が併用される。また、明治13(1880)年2月13日^{注59)}、明治13(1880)年3月14日付『朝日新聞』^{注60)}には“舶來釘”、明治13(1880)年10月26日付『朝日新聞』では“西洋釘”^{注61)}とする呼称が併存する。但し、続く明治15(1882)年10月13日付の『朝日新聞』には“洋釘”^{注62)}とあり、いわゆる“洋釘”の呼称は、“西洋釘”の省略と考えることができ、明治15(1882)年頃からの呼称と考えることができる。

一方、明治16(1883)年8月11日付『朝日新聞』では“舶來丸釘”^{注63)}とあるが、“丸釘”の記載は上述した『中外』紙の記事と前後するもので、丸釘の呼称はこの頃から一般化したとすることができる。

6 さいごに

『中外』紙などに掲載された横浜商況の記載により、明治時代前半における洋釘の普及について考察を行うとともに、角釘と丸釘が併用された背景を考察し、明らかとなるのは以下の諸点である。

- 1) 明治10(1877)年代から明治20(1887)年代半ばにおける『中外』紙の横浜商況に掲載された釘の記載を通読すると、この期間では釘類として“鉄釘類”、“釘棹類”、“釘鉄類”を見ることができる。
- 2) “鉄釘類”では丸釘が明治10(1877)年には少なくとも2件、輸入取引されたことが確認できた。
- 3) “釘棹類”とは同時代の英字紙に“Nail-rod”とされ、これを材料として丸釘、即ち洋鉄国産丸釘が製造された考えられる。
- 4) “釘鉄類”の掲載数は明治12(1879)年以後に激増し、これを原料として“洋鉄国産和釘”が製造されたと考えることができる。

5) この期間における釘流通の動向を見ると、明治10(1877)年代前半には洋鉄国産和釘の製造伸張及び価格低減があり、一方、明治10(1877)年後半は、洋釘-丸釘の輸入が激増し、この期間には和釘と洋釘の併用を見ることができたと考える。

6) 輸入された釘に対す“丸釘”の呼称は、管見では明治12(1879)年5月28日付『中外』紙が初見であり、明治15(1882)年頃から一般化した。また、“洋釘”の呼称は“西洋釘”の省略と見ることができ、この呼び名も明治15(1882)年頃から一般化したとすることができる。

参考文献

1) YASUDA, Z. :Kugi, 1916.12(in Japanese)
安田善三郎:釘、1916.12

2) HIRAYAMA, I., KIMURA, T., MIFUNE, T., UMMEJIMA, O., NISHIZAWA, K., STUDY ON THE BUILDINGS USED THE JAPANESE NAIL AND THE WESTRN NAIL TOGETHER, AIJ Journal of Technology and Design 51, pp.767-770, 2016.6(in Japanese)
平山, 木村勉, 御船達雄, 梅嶋修, 西澤哉子:和釘と洋釘を併用する建物、日本建築学会技術報告集 51, pp.767-770, 2016.6

3) HIRAYAMA, I., STUDY ON THE USE AND THE PRICE OF THE NAIL TO WATCH IN THE ARCHITECTURAL DOCUMENTS OF THE KAITI-GAKKO, Nagaoka Institute of Design Bulletin 15, pp.65-70, 2018.3(in Japanese)
平山: 開智学校の建築資料に見る釘の使用と値段、長岡造形大学紀要 15, pp.65-70, 2018.3

4) HIRAYAMA, I., STUDY ON THE CONVERSION FROM THE JAPANESE NAIL TO THE WESTERN NAIL IN TERM OF PRICE, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ) 757, pp.653-659, 2019.3(in Japanese)
平山: 価格から見た和釘から洋釘への転換、日本建築学会計画系論文集 757, pp.653-659, 2019.3

5) HIRAYAMA, I., STUDY ON THE PRICE OF THE WESTERN NAIL IN THE MIDDLE OF MEIJI 10 (1877) 'S TO THE MIDDLE OF MEIJI 20 (1887) 'S SEEN IN THE BUSINESS SITUATION OF “TYUGAI-BUKKA-SINPP0, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ) 764, pp. 2195-2201, 2019.10 (in Japanese)
平山:『中外物価新報』などの商況にみる明治 10(1877)年代半ばから明治20(1887)年代半ばにおける洋釘の価格、日本建築学会計画系論文集 764, pp. 2195-2201, 2019.10

注

注1) 日本新聞社社史編纂室:日本経済新聞八十年史、55～59 頁、昭和31(1956).12。『中外商業新報』との改題は明治22(1889)年1月27日の2049号からとする。

注2)松本市:史料開智学校6、平成7(1995).2、参考文献3)

注3) 大阪大学物価史研究会:明治期大阪卸売物価資料(4)、大阪経済学30-1、120～191 頁、昭和55(1980).6

注4) 参考文献1) 117 頁

注5)村松貞次郎:日本建築技術史、151～152 頁、地人書館、昭和34(1959).11、も参考文献1)と同内容を記すに留まる。

注6) 梅本二郎:釘とともに歩んだ120年、19 頁、平成元 (1989) .10

注7) 公益財団法人:文化財建造物保存技術協会:重要文化財旧鶴岡警察署庁舎保存修理工事報告書、平成30(2018).3、は参考文献2)の執筆後にまとめられた報告書で、同書によれば199～201 頁において建物は明治17(1884)年11月の竣功で、角釘と丸釘の併用が認められることを報告する。

注8) 商況社:中外物価新報、明治10(1877).6/23、59 頁

注9) 商況社:中外物価新報、明治10(1877).12/25、187 頁

注10) 商況社:中外物価新報、明治11(1878).1/16、15 頁

注11) 商況社:中外物価新報、明治11(1878).1/23、23 頁

注12) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).4/23、127 頁

注13) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).4/30、135 頁

注14) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).5/7、143 頁

注15) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).10/1、311 頁

注16) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).5/28、167 頁

注17) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).12/10、391 頁

注18) 商況社:中外物価新報、明治14(1881).11/16、263 頁

注19) 商況社:中外物価新報、明治10(1877).3/31、50 頁

注20) 商況社:中外物価新報、明治10(1877).7/28、110 頁

注21)竹林滋:新英和大辞典6版、1867 頁、平成14(2002).3、によれば、①ピクル〔東洋諸国で用いる重量の単位 =100catties.〕②(中国の)担〔=100 catties, 60.48kg、現在は50kgに換算〕、とある。

注22) 商況社:中外物価新報、明治11(1878).7/17、215 頁。なお、“ベルジウム”は向かって右側に二重傍線が引かれる。ベルジウムとは“Belgium”であり、ベルギーの正式名称の音読となる。

注23) 商況社:中外物価新報、明治11(1878).11/30、367 頁

注24) 商況社:中外物価新報、明治11(1878).11/30、367 頁

注25) 商況社:中外物価新報、明治11(1878).12/28、191 頁

注26) 商況社:中外物価新報、明治10(1877).11/17、175 頁

注27)日本国語大辞典第二版編集委員会:日本国語大辞典第二版5、1361 頁、平成13(2001).5

注28) A. W. Hansard: THE JAPAN HERALD、元治元(1864).4/16、214 頁、が初見。平山ほか:洋釘の輸入を示す元治元 (1864) 年4月の記録 和歌山県橋本市中心市街地の町と町家の調査研究 その174、日本建築学会大会学術講演梗概集、建築歴史・意匠847～848 頁、令和元(2019).7、に詳しい。

注29) 朝日新聞社:朝日新聞、明治13(1880).2/13、1 頁。なお、関連する記事が、同紙の明治13(1880).10/26、1 頁、にも見ることができる。

注30) 朝日新聞社:朝日新聞、明治13(1880).3/14、1 頁

注31) 商況社:中外物価新報、明治10(1877).3/31、50 頁

注32) 商況社:中外物価新報、明治10(1877).7/7、102 頁

注33) 商況社:中外物価新報、明治10(1877).10/9、138 頁

注34) 商況社:中外物価新報、明治10(1877).11/17、174～175 頁

注35) 商況社:中外物価新報、明治23(1890).3/9、付録4 頁

注36) 商況社:中外物価新報、明治11(1878).6/8、171 頁

注37) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).6/25、199 頁

注38) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).5/14、151 頁

注39) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).5/24、163 頁

注40) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).5/7、143 頁

注41) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).5/21、159 頁

注42) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).4/16、119 頁

注43) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).4/26、131 頁

注44) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).4/26、227 頁

注45) 福本都治:和釘から洋釘へ 製釘技術の転換、住と建築497、5 頁、平成14(2002).5

注46) 村松貞次郎:日本建築技術史、151 頁、前掲。なお、村松はこの記載に対して根拠は示してはいない。

注47) 神保新一:大川のほとり、72 頁、昭和42(1967).11

注48) 大阪大学物価史研究会 宮本又次:近世大阪の物価と利子、335 頁、昭和33(1958).8

注49) 大阪大学物価史研究会 宮本又次:近世大阪の物価と利子、111 頁、前掲

注50) 白崎五郎七:日本全国商工人名録、315 頁、明治25(1892).4

注51) 併記される釘並4寸も1.27 円から0.60 円へ下落する。

注52) 大里勝馬:明治以後本邦主要経済統計、76 頁、昭和41(1966).7、における卸売物価係数の内、明治元(1868)年以後の数値を記載する朝日新聞社による明治元(1868)年を100とした係数を用いた。これによると明治7(1874)年は143、明治12(1879)年は145とある。

注53) 商況社:中外物価新報、明治10(1877).6/23、59 頁

注54) 商況社:中外物価新報、明治11(1878).1/16、15 頁

注55) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).4/30、135 頁

注56) 商況社:中外物価新報、明治12(1879).5/28、167 頁

注57) 商況社:中外物価新報、明治15(1882).5/10、143 頁

注58) 朝野新聞社:朝野新聞、明治13(1880).3/1、1 頁

注59) 朝日新聞社:朝日新聞、明治13(1880).2/13、1 頁

注60) 朝日新聞社:朝日新聞、明治13(1880).3/14、1 頁

注61) 朝日新聞社:朝日新聞、明治13(1880).10/26、1 頁

注62) 朝日新聞社:朝日新聞、明治15(1882).10/13、4 頁

注63) 朝日新聞社:朝日新聞、明治16(1883).8/11、4 頁

STUDY ON THE DIFFUSION OF THE WESTERN NAIL AND BACKGROUND OF THE COMBINED ON THE USE OF THE JAPANESE NAIL IN THE FIRST HALF OF THE MEIJI PERIOD

Ikuo HIRAYAMA *¹

*¹ Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

The author has so far considered the spread of the Western nails in the Meiji era from the viewpoint of the price. As a result, it has already shown that it was the price of a 1.5 inch long nail is 1/21 in 1885, 1/50 at the end of the Meiji period, compared to the same length of the Japanese nails in 1875. By the way, the question remains as to how the nails spread before 1885. Although the authors have already reported that the Japanese nails -square nails- and the Western nails - round nails- were used together from the late Meiji 10s to the Meiji 20s, in spite of such a price difference, the reason why square nails and round nails are used together cannot be clearly shown. Therefore, this article aims to clarify the background of the combined use of square nails and round nails by examining the spread of the Western nails in the first half of the Meiji era according to the actual situation of imports.

Based on the description of the business situation in Yokohama published in “Chugai-bukka-shimpo” and “Chugai-syogyo-shimpo” (hereinafter referred to as “Chugai”), I considered the spread of the Western nails in the first half of the Meiji period. From the Meiji 10s to the mid-Meiji 20s, “kugi-tetu”: nail iron, “kugi-sao” and “tetu-kugi” : iron nail were confirmed as nails based on the descriptions of nails published in the Yokohama business situation of “Chugai” papers. Of these, it was confirmed that round nails were imported at least twice in Meiji 10 for "iron nails". It can be judged that “kugi-sao” were considered to be “nail-rod” in English paper of the same era, and it was considered that round nails, the round nail made of the nail-rod as the material, the Japanese-made round nail was manufactured by Western Iron. The number of “nail irons” has increased dramatically since 1879, and Japanese nail was produced in Japan using this as the raw material. The distribution of nails during this period can be considered as follows. In the first half of the Meiji 10s, there was a reduction in prices due to the expansion of the Japanese nail production using Western iron. In addition, since the import of the Western nails, or round nails, increased sharply in the late Meiji 10s, Japanese nails and the Western nails were used together.

(2019年10月10日原稿受理, 2020年1月9日採用決定)